



# Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates

## セム系部族社会の形成



文部科学省科学研究費補助金  
「特定領域研究」  
Newsletter No. 14

2009年3月号



## はじめに

平成20年度の最終号となる本ニューズレターは3編の論考で構成されています。

西秋良宏氏の「紀元前3千年紀の西アジア 第5回公開シンポジウムの記録」は、平成21年1月31日と2月1日の2日にわたり開催された第5回公開シンポジウムの報告です。総括班のシンポジウム企画・運営を担う西秋氏による、研究発表各々に関する明解な解説付きの報告です。「紀元前3千年紀の西アジア：ビシュリ山系に部族社会の起源をさぐる」を全体テーマとして開催された今回のシンポジウムは、氏が言うように、シリア調査地域における領域研究各班の研究成果が蓄積されてきている現状のもとで、それらに関連研究と照らし合わせながらビシュリ地域の紀元前3千年紀を再考することを目的としたものです。現地調査の成果を公開するねらいで開催された昨年度の第4回シンポジウムとは異なり、最終年度である平成21年度の研究収束へ向け、貴重な示唆を提供することになりました。

藤井純夫、足立拓郎両氏の「ビシュリ山系北麓ケルン墓群の第一次～第三次発掘調査」は、2008年の3月から11月という短期間に、アクセスの悪さと厳しい砂嵐の中で、精力的に実施されたヘダージェ1、ヘダージェ2、ヘダージェ3のケルン墓群における第1次～3次発掘調査の報告です。両氏は、「一連の調査によって、ヘダージェ＝ケルン墓群が二つのグループに分類できることが分かった。一つは、ヘダージェ1南列（1～10号ケルン墓）やヘダージェ2のような、長期造営型の大規模ケルン墓群である。ヘダージェ1北列（11～14号ケルン墓）も、途中の中断を除けば、これに準ずるであろう。これらのケルン墓群間には大きな時期差は無く、ほぼ並行して造営されたと考えられる。もう一つのグループは、ヘダージェ3および4のような、短期造営型の小規模ケルン墓群である。型的な比較によれば、その年代は大規模ケルン墓群の造営期間内に収まるものと思われる」と述べられ、さらに、ビシュリ山系北麓のケルン墓群が「中期青銅器時代北東シリアにおける遊牧民の一大勢力… Martu/Amurruの墓域である可能性は、ますます高くなった」という重要な考えを提起しています。藤井研究班の最終年度目標であるワディ＝ラフーム周辺未盗掘ケルン墓調査による確実な年代観提示とビシュリ山系北麓全域再踏査によるケルン墓群分布・構成の包括的理解へ向けて、研究の飛躍的な進展が期待されます。

久米正吾、沼本宏俊両氏による「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査」は、ガーネム・アル・アリ遺跡直近墳墓群（ワディ・シャップート、ワディ・ダバ墓域）の第1次調査（2008年4月～5月）と第2次調査（2008年10月～11月）の概報です。ワディ・シャップート/ワディ・ダバ墓域の考古学的物証をテル・ガーネム・アル・アリ遺跡と現在発掘調査進行中であるビシュリ山北麓青銅器時代ケルン墓群のそれらと比較研究することは、この3者の関係を解き明かし、ユーフラテス川中流域とビシュリ山地域をとりまく青銅器時代の集団構造の解明に大きな前進をもたらすことが期待されます。

平成21年2月20日

領域代表者 大沼克彦

## 目次

紀元前3千年紀の西アジア - 第5回公開シンポジウムの記録 西秋良宏 1

ビシュリ山系北麓ケルン墓群の第一次～第三次発掘調査  
藤井純夫 足立拓郎 6

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査  
久米正吾 沼本宏俊 11

表紙

A  
B | C

A：テル・シャップート1号丘と2号丘（写真右奥に見えるのはガーネム・アル・アリ遺跡）

B：ワディ・シャップート墓域に向かうワディ

C：ガーネム・アル・アリ遺跡上の現代墓（遠方に見えるのはテル・シャップート墳丘墓）

## 紀元前3千年紀の西アジア - 第5回公開シンポジウムの記録

西秋良宏（東京大学総合研究博物館）

計画研究「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成」研究代表者  
総括班「総合的研究手法による西アジア考古学」連携研究者

はじめに

「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ピシュリ山系の総合研究」という課題をかかげた本特定領域研究も4年目を終えようとしている。その副題にもあるように、この研究は、シリア内陸部のピシュリ山系で多面的なフィールドワークをおこない、そこで得た実地データを核としてセム系部族社会研究を展開することを企図したものである。初年度の準備期間をへて二年目からフィールドワークが始まり、三年目からはそれにもとづく本格研究が進展しつつある。この間の事情は、成果公開のため開催しているシンポジウムのあり方にもよくあらわれている。すなわち、当初の二年間におこなった3回のシンポジウムは13にのぼる各計画研究班の研究方針の紹介やその統合にむけての調整という側面が強かったのに対し、昨年の第4回シンポジウムから具体的なテーマ討論に装いを変えることとなった。

今回テーマとしたのは、「紀元前3千年紀の西アジアーピシュリ山系に部族社会の起源をさぐる」である。「西アジア部族社会とピシュリ山系」と銘打った昨年同様、現地調査成果を中心とする報告会であったが、今回は、紀元前3千年紀という時代に焦点をあてた点でさらに絞りこんだものとなった。前3千年紀とは、いうまでもなく、青銅器時代の前半にあたる。アッカド語粘土板文書でアムル、あるいはシュメール語文書でマルトゥと記されたセム系集団がピシュリに出現していたことが確実視されている時代である。この時期の遺跡であるガーネム・アル=アリ遺跡やケルン墓群の発掘成果が蓄積され、さらには同時期定住民の墓群、放牧地などの遺跡踏査が領域研究各班によって進められてきた現状にかんがみ、その成果を関連研究と照らし合わせながらピシュリ地域の紀元前3千年紀を再考することを目論んだ。

シンポジウムは平成21年1月31日、2月1日の二日間にわたって開催された（図1）。会場は国土館大学鶴川校舎である。今回のシンポジウムは三つのセッションで構成された。それぞれ現地調査の報告、その成果を別の角度から見る諸研究、部族にかかわる諸研究を

あつかうもので、総計15本の講演がおこなわれることとなった。開催担当であった筆者の感想をまじえながら簡単に内容を報告したい。

ユーフラテス河中流域の紀元前3千年紀

最初のセッションでは現地調査成果を中心とした報告がなされた。それにはユーフラテス河畔にいたセム系集団の定住遺跡の一つとみられるガーネム・アル=アリ、およびその周辺の遺跡調査に関する報告が含まれる。全部で7本の講演があった。

まず、松本健（敬称略、以下同じ）が、衛星画像を利用してテル型遺跡を抽出する手法開発とその実践について述べた（計画研究A13）。現地踏査によって存在がわかっているユーフラテス河中流域のテルを衛星画像法で抽出できるかが検討された。イラクのような政情不安地域はもちろん、本プロジェクトにあっても、

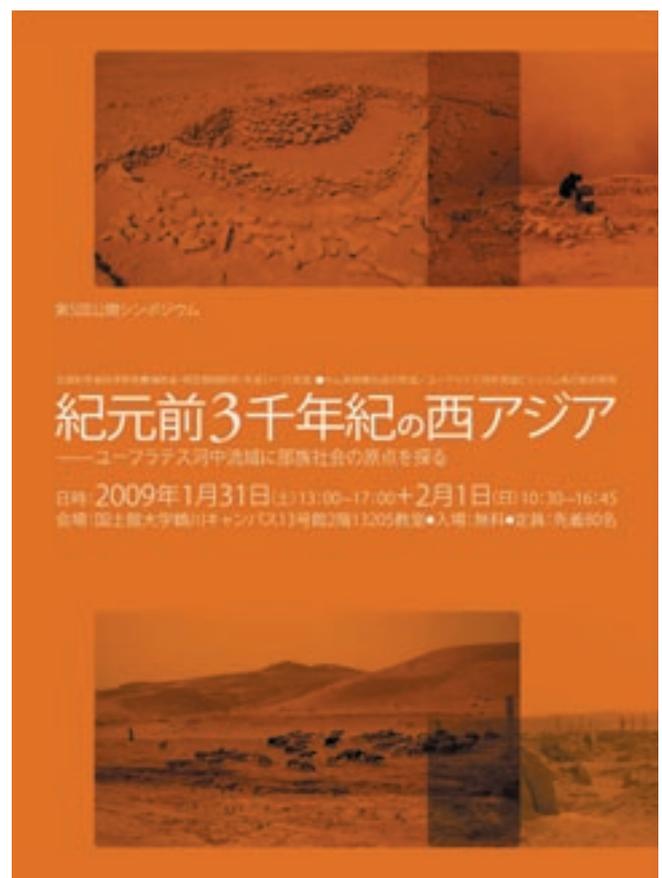


図1：第5回シンポジウム案内リーフレット表紙

その対象地域はユーフラテス河畔から内陸ピシュリ山中のケルン墓まで、東西、南北とも約70kmにおよぶ広範囲であるから、そこを全て踏査して遺跡分布を知ることが現実的でない。したがって、衛星画像方式が開発されれば一定の意義をもつであろう。ただし、現状では、解像度等の事情により中規模以上のテル型遺跡に限って可能であったとのことであった。いずれにしても、この方法は地形認定にかかわるものであって、特異な地形をなさない遺物散布地などは同定不能であるから、現地踏査を不要にするわけではない。

実際の遺跡分布踏査について報告したのが西秋である（計画研究A02）。ガーネム・アル＝アリ遺跡から半径10km圏で実施したもので、今回はテル南に広がるピシュリ台地縁辺部の西半分を対象とした。新たに見つかった遺跡群には旧石器時代、新石器時代、青銅器時代の遺跡が含まれていたが、確実な銅器時代の遺跡は見あたらなかったことから、青銅器時代集団の形成過程が一つの検討課題になることを指摘した。また、青銅器時代の遺跡は拠点集落、墓地、短期逗留地の三種で構成されており、そのセットが大きなワディをはさんで数キロ間隔でならんでいたことをもとに、各集団の日常的な活動領域を同定できる可能性があることを述べた。加えて、シャブーティアンと命名した独特な前期青銅器時代剥片石器群を定義できたことを報じ、その分布を調べれば河畔集団の内陸への放牧展開が探れることも指摘した。

続いて大沼克彦が、ガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘報告をおこなった（総括班）。2008年4月以来、既に四シーズンの発掘が実施されている。二つのトレンチ発掘を進めるかたわら、テル地表面全域のクリーニングによる建物プラン調査が実施されていることが述べられた。トレンチでは前期青銅器時代 期から 期初頭の集落が見つまっているが、地山には到達していない。最初の住人の文化伝統を知るためにも最下層



図2：久米正吾による報告

の調査がまたれる。一方、クリーニング調査は表土堆積がうすい本遺跡の特色をいかしたもので、集落構造、ひいては社会構造の解明に資するであろう点で興味深い。全貌を語るにはいたっていないようだが、既に墓域らしきものが見つまっている点は注意をひいた。

自然科学分析を担当する星野光雄の班からは、中村俊夫がガーネム・アル＝アリ遺跡の放射性炭素年代測定結果について報告した（計画研究A08）。年代測定は周辺段丘採集のサンプルをふくむ広範なものであったが、トレンチ試料の測定結果につき特に議論があった。すなわち、既発掘層は紀元前2850 - 2500年頃という今回の結果が、共伴土器の型式からみて2 - 300年、古すぎるという考古学側からの指摘があった。当日の質疑応答では結論がでなかったが、炭化物が採集されたのが当時の生活面上であるのか、古い地層を掘りあげた際に堆積した土壌中なのかによって年代がずれるのは当然なのであるから、試料採集コンテキストの検討が必須と思われた。

さて、当プロジェクトでは、拠点集落の発掘の他、その墓地の調査も視野にいれている。昨年、常木晃がガーネム・アル＝アリ直近に青銅器時代墓地群があることを指摘したが、その一つ、シャブート墓地群の踏査、測量をおこなった沼本宏俊班（計画研究A05）が調査結果を報告した。演者の久米正吾によれば、多様な型式の墓が混在しているものの、型式の組み合わせによっていくつかの墓域が認定できるという（図2）。すなわち、墳丘墓群、石造墓室群、石造墓室＋地下式横穴墓群、地下式墓室群の四域である。それらが地形やテルからの距離と相関をもって分布しているらしいという興味深い指摘もなされた。この分類は墓が盗掘されていたため可能になったものであるが、一方で副葬品の構成などが検討できないためその検証や意味づけは今後の課題とされた。未盗掘墓の発見が待たれる。

当地の青銅器時代墓群の調査については既に日本人による実績がある。調査地北西に位置するユーフラテス河タブカダム建設にともなう水没遺跡調査である。1974年から1980年まで古代オリエント博物館が実施した発掘資料の整理結果について石田恵子が予備的に報じた。都市化過程を扱う常木晃班（計画研究A04）の成果の一部である。前期青銅器時代後半の墓群もふくまれている。ドルメン墓や土坑墓などガーネム・アル＝アリ周辺調査では未発見の型式をふくめ、多様な型式の墓で墓域が構成されていることが強調された。未盗掘墓も調査されており副葬品も豊富な例があるから、それらの分析が進めば久米が示唆したような墓域構成の意味を説き明かすヒントが得られるかも知れない。

このセッション最後の報告は、本郷一美が主宰する動植物遺存体分析班のもので、丹野研一が新石器時代から青銅器時代にかけての出土穀物の変遷について述べた（計画研究A10）。新石器時代以降、コムギ、マメ類など多様な食用植物が利用されていたのに対し、紀元前3千年紀の青銅器時代になると構成が激変することが指摘された。すなわち、オオムギが卓越するようになる。従来この現象は南メソポタミアの低地部で知られており、塩害のせいであると喧伝されていたが、同種の変化は塩害と無関係なハブール平原やユーフラテス河中流域でもひろく認められることから、むしろオオムギ需要が高まったという可能性を考慮すべきという。理由はともかく、農耕適地におけるセム系集団の生業基盤を定義する際の重要な知見である。

#### 部族社会研究の視点

現地調査に参加しない班をふくめて、多様な角度から前3千年紀の社会について考察する報告を二日目の午前中に集めた。ただし、最初の岡田保良の報告（計画研究A11）は、都合により翌日に繰り下がった演題であり、実質的には前日のセッションの続きである。ガーナム・アル＝アリで見ついている建築の特徴、近隣のハマディーン遺跡の測量調査の成果、直近にある墓の石積み技術などについて報告された。墓の構造については、イラク領ユーフラテス河中流域にあり国士館大学がかつて発掘したハディーサ遺跡群のそれとも類似するとのことである。同一伝統をもつ内陸集団の分布を知る上で興味深い。

月本昭男の班（計画研究A07）は、「パレスチナにおける都市の発達と“セム”系民族の展開」を課題にかけ、イスラエルにおける西部セム系集団を調べている。今回は研究協力者の山藤正敏が、南レヴァント地方の都市化研究の現状について概述し、ユーフラテス河中流域における場合を検討するための比較材料を提出した。都市化の証拠は前期青銅器時代 期にあらわれるが、 期になると、おそらくは気候乾燥化により都市が放棄され集団は遊牧化したとのことである。北メソポタミアにおいても同時期の社会変質（ポスト・アッカド）はよく知られている。中間地域にあたるユーフラテス河中流域の事情はどうだったのだろうか。

高濱秀は、昨年に引き続き、紀元前1千年紀のモンゴルに展開した初期騎馬遊牧民の墓の特徴について述べた（公募研究01）。アルタイ地方のいくつかの墓群が紹介され、それぞれ一列にならぶ墓群ユニットをいくつか含んでいることが指摘された。個々の列では、男女または男性を葬った墳墓が中央に設けられ、その

両側に女性や子供の古墳が設けられている。要するに、家系を反映しているものらしいという。西アジアから遠く離れた地域のこととはいえ、同じく部族社会をなしていた集団の所産と推定されているだけに示唆に富む話である。

このセッション最後の発表は、美術史的観点からセム系社会をみる宮下佐江子班の成果として、津村眞紀子がローマ時代パルミラのコインについて報告した（計画研究A12）。ローマ時代パルミラで発行されたコイン、あるいはそこで出土したコインの種別などを検討し、そこから部族性がとらえられないかという試みを述べた。課税を取り仕切った部族がいたのなら、考古学的情報を含めれば新たな視点になるかも知れない。また、パルミラには20ないし30の部族があったことを記した碑文があるというから、文字情報との照合も有益と思われた。

#### 部族社会の歴史

さて、以上の報告では「部族」というタームにふれるものが少なかったが、最後のセッションでは、部族に直接かかわる情報について議論された。まず、人類学の赤堀雅幸が（公募研究02）、文化人類学で認識されている近現代アラブ系部族の特徴について述べた。アラブ系部族は、領域をなして居住していること、サイズは多様だが集団の構造は等質であること、血統を父系のみで語ること、父祖との関係で規定されていること、の4点に特徴があるという。そして、アラブ的な部族社会というのは特異な社会形態であり、乾燥地という過酷な環境で発達したものではないかと述べられた。過去をさかのぼる本プロジェクトの定点となるような情報提供であった。

この後、粘土板文書から見た部族ないし血族に関する発表が二本続いた。一つめは、紀元前2千年紀に関するもので、沼本宏俊班（計画研究A05）が発掘中のハブール河流域、テル・タバンの遺跡出土資料を含めつつ山田重郎がアッシリア粘土板から得られる情報について報告した。父系出自の社会であったことなど、当時の北メソポタミア集団の社会は現代アラブのそれを彷彿とさせる。一方、シリア砂漠のアラム人と北メソポタミア地域のアッシリア人との抗争を示す文書史料も豊富であり、その境界が紀元前2千年紀を通じて変化していることにも言及された。内陸集団のメソポタミア世界への侵入の追跡は、本領域のテーマの一つでもある。

続く前川和也は紀元前3千年紀のシュメール世界で得られる粘土板情報を紹介した（計画研究A06）。シ

ユメールでは、王名表をふくめ父系出自を記した文書が希薄であることが述べられ、縦の血縁に関心がないか、または、それを文書に残す習慣が無かった可能性についてふれられた。これが書記上の習慣なのか、社会が異なっていたせいなのかはたいへん興味ひかれる課題である。今回はシュメールの遺跡研究がプログラムにはっていないが、粘土板文書から十分検討できると思われる。

最後に、考古学にもどり、遊牧部族の墓地であったと考えられるピシュリ山ケルン墓群を調査している藤井純夫が成果を報告した（計画研究班 A03）。これまでに藤井が調査したケルン墓は、列をなすという点で高濱報告の事例と類似している。それらの単位が大量に見つかることから、藤井も、個々の単位は部族や氏族というより家系などもっと下位の集団が残したものと考えている。一方、大型墓が並ぶ例については別の考え方も必要とされた。また、これまで調査されたケルン墓群は中期青銅器時代に属するらしいという重要な指摘もあった。すなわち、ユーフラテス河畔に多いガーネム・アル＝アリのような前期青銅器時代集落よりも時期が下る。レヴァント南部でみられたような、定住民の遊牧化が起こった可能性があることも示唆された。

## 討論

以上のような個別報告の終了後、初日は大沼、西秋、二日目は大沼、藤井が進行役となって、総合討論をおこなった（図3）。いずれにおいても議論のテーマは、今後の諸計画研究をいかにすすめるかの実のある成果をだすか、そのための戦略策定である。

初日は、ガーネム・アル＝アリ遺跡にしばって、調査の方向性が話し合われた。要点は二つ。一つは、初期部族社会を形成したとおもわれる青銅器時代集団の生業様式、もう一つは社会組織の内実。それらを遺跡からどうとらえるかという問題である。マリ出土粘土板文書にはシリア砂漠の集団が半農半遊牧民であると



図3：二日目の総合討論を司会する大沼克彦（右）と藤井純夫

記されているという。赤堀班で人類学調査を実施した高尾賢一郎によれば、現ガーネム・アル＝アリ村の住人も、かつては季節的にユーフラテス河畔とピシュリ山系を往復する半農半遊牧民であった。そのような生活形態を青銅器時代の考古学的証拠にも同定できれば本領域にとって前進である。一方、当時の社会組織の解明については、ガーネム・アル＝アリの家屋配置や墓群調査が重要な知見を提示するに違いない。現在進行中の集落全域クリーニングの成果に、特に期待がよせられた。

二日目には、次年度の研究計画、連携方針が確認された。特に話題となったのは、ガーネム・アル＝アリという河畔の拠点集落、シャブートなどその直近台地上にある定住民の墓地群、そして、内陸ピシュリ山中にある遊牧民の墓と目されるケルン墓群、さらには、それらにまたがる地域で実施されている遺跡踏査、この四つのフィールドワークの成果をいかに連結させるか。そして、他の関連研究班がいかに、それらの情報を利用し、あるいは情報を提供しながらモデル構築に寄与していくのか、という方針である。出席した各計画研究班の全てがそれぞれの分野から有益な提言をおこない、実のある討論が繰り広げられた。

## おわりに

昨年の第4回シンポジウムをふりかえってみると、その総合討論では、青銅器時代における部族ないし集団の共時的関係を調べるための考古学的手法と、青銅器時代にいたるまでの先史学的経緯、という二つの点が議論された。いずれも、「ピシュリ山系の総合研究」が本格進展する前のことで、今思えば可能性が話し合われたにすぎなかった。それと比べると、今回は個別報告も討論も飛躍的な進展をみたといってよいと思う。この一年間、度重なるフィールドワークに参加、協力した諸研究班の成果が大きいことを実感した。残り1年となった本プロジェクトではあるが、このペースならば、期限内にいつその成果を得るのではないかと期待を抱かせるシンポジウムであった。

中でも、調査諸遺跡の考古学的な年代が決まりつつあることが大きな進展をもたらした。河畔拠点集落は前期青銅器時代、内陸ケルン墓は中期青銅器時代、と年代を違えているらしいことが判明したことは特に重要である。後者は前者が遊牧民化して残した遺跡なのかどうか。二日目の討論でも言及されたように、文書に現れる最古のセム系集団たるアムルないしマルトゥが正しくピシュリ山の集団をさしているのならば、現在のところ、それは中期青銅器時代のケルン墓造営者

たちであり、そのルーツはガーネム・アル=アリなど河畔の集落民であったという可能性につながる。まさに、アムル・マルトゥの形成や生活実状を扱う本プロジェクトの核心にかかわる議論が展開できそうな気配である。

ただし、これは、本プロジェクトの一面にしかすぎない。上記はセム系集団の文化史的再構築という面での成果であり、もう一方の柱である、かれらの社会構造の内実、すなわち、「部族」社会の形成を語るだけの準備はいまだできていないようにみえる。ガーネム・アル=アリ集落の建物構成を調べる研究、その墓群さらにはケルン墓群の研究のいっそうの進展がのぞまれる。アラブ系「部族」を定義した赤堀は、その特徴を領域的、分節的、父系、出自の4項目に整理したが、それは考古学的に検証可能な項目をふくむ。墓域

をなす台地墓群や列をなすケルン墓、さらにはそこで得られる人骨などは、検証に格好の材料であるに違いない。モノやピリオドを単位とする文化史よりもヒトやイベントに着目する研究は、ポスト・プロセス考古学運動によって、近年、とみに方法論がみがかれてきたところでもある。考古学系諸班の腕のみせどころであろう。

最終年度は2009年11月に国際シンポジウム、翌1月ないし2月には今回のような公開シンポジウムが計画されている。それまでに、その成果が整理され、セム系部族社会の形成についてさらなる視点が提示できることを期したい。

なお、今回のシンポジウムの内容は収録集として刊行する予定である。筆者の理解不足による本稿の誤り等は、それにて補っていただければと思う。

## 第5回公開シンポジウム

### 紀元前3千年紀の西アジア ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る

日 時：2009年1月31日(土)13:00 - 7:00 + 2月1日(日)10:30 - 16:45

会 場：国土館大学鶴川キャンパス13号館2階13205教室

主 催：特定領域研究「セム系部族社会の形成」総括班

#### 一日目

13:00 趣旨説明 大沼克彦(国土館大学)

#### 【ユーフラテス河中流域の紀元前3千年紀(1)】

13:10 西アジア考古学遺跡のデータベース化の研究  
松本 健(国土館大学)

13:35 ユーフラテス河中流域の古代集落  
西秋良宏(東京大学)

14:00 ガーネム・アル=アリ遺跡の発掘  
大沼克彦(国土館大学)

14:25 ガーネム・アル=アリ遺跡の14C年代測定  
中村俊夫(名古屋大学)

14:50 ~ 15:10 休憩

#### 【ユーフラテス河中流域の紀元前3千年紀(2)】

15:10 ガーネム・アル=アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査 久米正吾(早稲田大学)

15:35 ユーフラテス河中流域ルメイラ周辺の前期青銅器時代墓地 石田恵子(古代オリエント博物館)

16:00 紀元前3千年紀の出土植物  
丹野研一(山口大学)

#### 【討論】

16:25 ガーネム・アル=アリ遺跡研究の可能性  
司会：大沼克彦・西秋良宏

17:00 終了

#### 二日目

#### 【部族社会研究の視点】

10:30 ユーフラテス河中流域の古代遺跡にみる建築組織 岡田保良(国土館大学)

10:55 南レヴァント地方前期青銅器時代の都市化  
山藤正俊(早稲田大学)

11:20 初期騎馬遊牧民族の墓群と部族  
高濱 秀(金沢大学)

11:45 パルミラのコインにみる部族性  
津村眞輝子(古代オリエント博物館)

12:10 ~ 13:10 昼食

#### 【部族社会の歴史】

13:10 イスラーム期以降のアラブ系部族の特徴  
赤堀雅幸(上智大学)

13:35 アムル人、アラム人とアッシリア  
山田重郎(筑波大学)

14:00 紀元前3千年紀の家と血縁集団  
前川和也(国土館大学)

14:25 ケルン墓群の分布と部族・氏族の相関  
藤井純夫(金沢大学)

14:50 ~ 15:10 休憩

#### 【総合討論】

15:10 紀元前3千年紀のユーフラテス河中流域と部族社会 司会：大沼克彦・藤井純夫

16:45 終了

# ビシュリ山系北麓ケルン墓群の第一次～第三次発掘調査

藤井純夫（金沢大学歴史言語文化学系）

計画研究「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」研究代表者

足立拓郎（中近東文化センター附属博物館）

計画研究「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」連携研究者

## 1. はじめに

セム系遊牧部族の成立過程を墓制面から追跡すること...これが、本班の研究課題である。そのため、ビシュリ山系北麓の青銅器時代ケルン墓群を鋭意調査してきた。調査は、2007年2月の予備踏査（藤井2005, 2006）に始まり、同年5月の分布調査（藤井・足立2007, Fujii 2008a）を経て、2008年3月の第一次発掘調査（藤井2008a, Fujii 2008b）同年5月の第二次発掘調査（Fujii et al. 2008a, 足立2008）同年11月の第三次発掘調査（Fujii et al. 2008b）へと、順次進展している。今回は、第一次～第三次の発掘調査について報告する。以下に述べる4件のケルン墓群を調査した（図1）。

## 2. ヘダージェ1 = ケルン墓群

ビシュリ山系北麓の寒村、バイル・ラフーム（Bir Rahum）の東約5kmに位置する大型のケルン墓群。テ

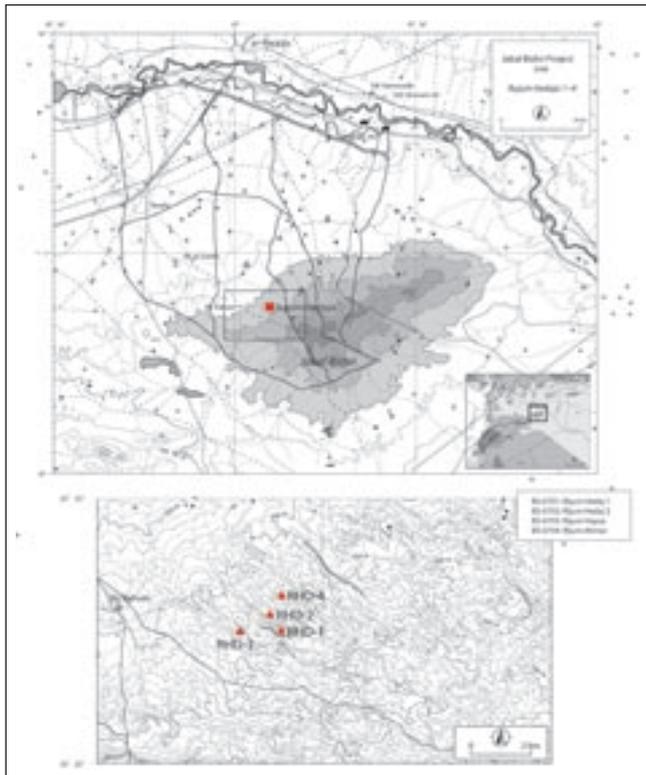


図1：ヘダージェ1 = ケルン墓群の位置（上）  
ヘダージェ1～4ケルン墓群の分布（下）

ーブル状石灰岩台地の南縁に沿って10基、北縁に沿って4基、計14基のケルン墓から成る（図2）。第一次発掘調査では、台地西端に位置する10号ケルン墓（RHD-1/BC-10）を半裁発掘した。続く第二次調査では1～9号ケルン墓（RHD-1/BC-1～9）を、第三次調査では11～14号ケルン墓（RHD-1/BC-11～14）を、それぞれ半裁ないしはトレンチ発掘した。その結果、以下のような観察を得た。

台地南縁に沿って展開する10基のケルン墓は、10号から1号へ向かって、すなわち台地の西端から東側付け根部分へ向かって、徐々に展開したと考えられる。その根拠は、1) 10基のケルン墓間に型式的な連続性が認められること、2) 10号ケルン墓に比べて、9号ケルン墓はやや新しい遺物を含んでいるように思われること、3) 7号ケルン墓の建材が6号ケルン墓に転用されていること、4) ヨルダンの調査事例でも、最遠端のケルン墓が最大かつ最も古く、丘陵手元部分に来るほど小規模かつ新しくなる傾向が認められること（Fujii 2004, 2005）などである。近隣の民族例として、例えばテル・ガーネム・アリ頂上部の墓域でも、村の開祖の墓が囲いを伴って特段に大きく、後続世代の墓は標準サイズに縮小するという観察を得ている。



図2：ヘダージェ1 = ケルン墓群平面図

これらのケルン墓は、3期に分類できるであろう（図3）。第1期の10号ケルン墓は、十字形の地上式墓室を備え、その周囲を詰め石で保護すると同時に、全体を二重の周壁で囲っている（図4）。第2期の9～5号ケルン墓は、半地下式の楕円形墓室を持つ。ただし、周壁は伴わない（図5）。第3期の4～1号ケルン墓も半地下式の楕円形墓室を組み込むが、周囲の詰め石部分が衰退しているのが特徴（ただし3号ケルン墓は例外的）。そのため、詰め石外縁の石列が消滅し、墓室壁面だけに収斂している（図6）。なお、5号ケルン墓は、詰め石部分が狭くなりながらも依然として2列の石壁を維持しているという点で、2期から3期への移行形態と定義できるであろう。

問題はこれらケルン墓群の年代であるが、9号ケルン墓（2期初頭）出土の青銅ピンの型式から、中期青銅器時代前半の年代が示唆されている（足立2008）。だとすれば、1期はその直前（おそらく前期青銅器時代末あるいは中期青銅器時代初頭）、3期はその直後（おそらく中期青銅器時代前半）に、それぞれ比定できるであろう。なお、ケルン墓群全体の年代幅は比較的小さく、最大でも200～300年程度と予測している。

台地北縁に沿って分布する4基のケルン墓も、これとの対比によっておおよそ年代付けられる。14号および13号ケルン墓（図7）は、尾根先端部への立地と

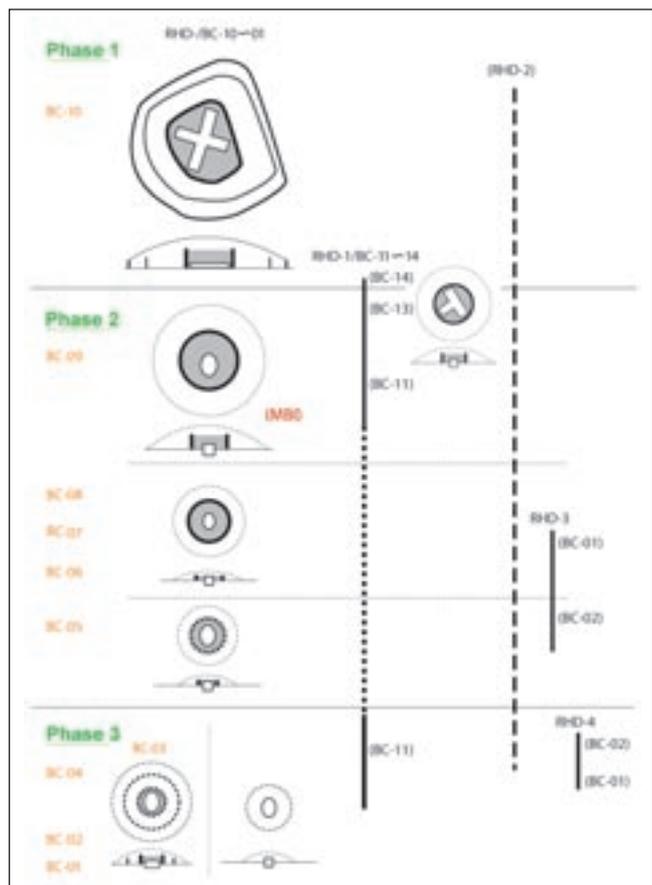


図3：ヘダージェ1～4＝ケルン墓群の編年



図4：ヘダージェ1＝ケルン墓群：10号ケルン墓

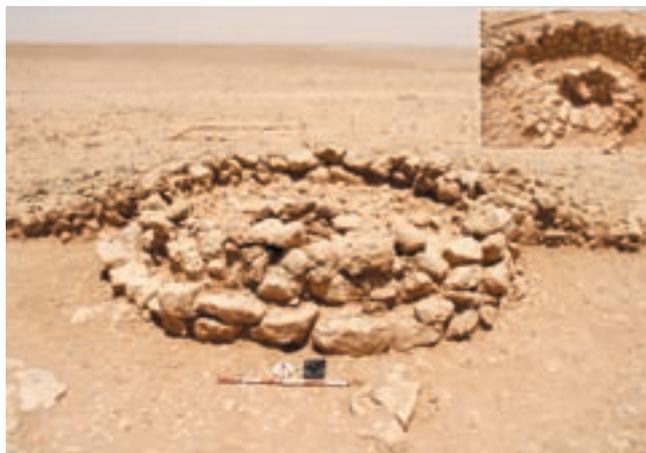


図5：ヘダージェ1＝ケルン墓群：09号ケルン墓



図6：ヘダージェ1＝ケルン墓群：01号ケルン墓



図7：ヘダージェ1＝ケルン墓群：13号ケルン墓

その規模および折衷的な性格から1期と2期の中間に、詰め石で囲まれた半地下式楕円形墓室を特徴とする12号ケルン墓は2期前半（特に、9～8号ケルン墓の並行期）に、詰め石部分を欠く11号ケルン墓は3期に、それぞれ位置づけられるであろう（図3）。だとすれば、ヘダージェ1=ケルン墓群の南北両ケルン墓群列は、時期的にほぼ並行して造営されたことになる。一つの台地が、二つの近縁集団に、墓域として分有されていたのであろう。

### 3. ヘダージェ2 = ケルン墓群

ヘダージェ1の北西約0.5kmに位置する大型のケルン墓群。第二次調査の最終日に、ケルン墓の認定作業と現状での写真撮影を実施した。その結果、テーブル状石灰岩台地の南縁に沿って約10基、北縁に沿って2基、計約12基のケルン墓を含むことが判明した。この点、ヘダージェ1=ケルン墓群と類似する。形式的にも共通点が多いとの観察を得ている。従って、本ケルン墓群は、ヘダージェ編年の1期から3期までをカバーするものと予想される。第三次調査で発掘を予定していたが、日程の都合により次回に延期された。



図8：ヘダージェ3 = ケルン墓群：01号ケルン墓

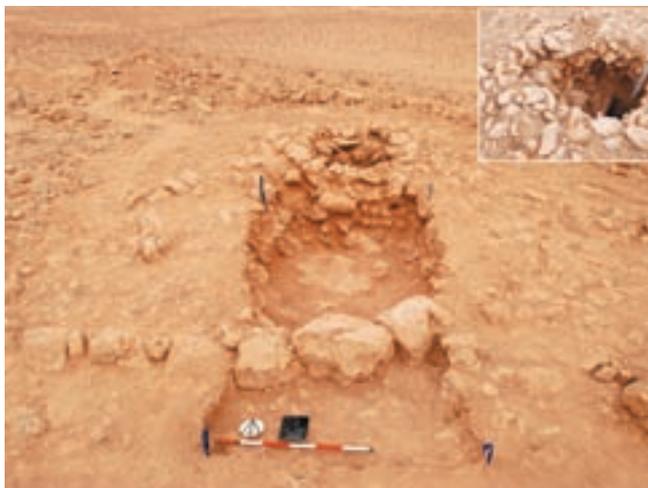


図9：ヘダージェ4 = ケルン墓群：02号ケルン墓

### 4. ヘダージェ3 = ケルン墓群

ヘダージェ1=ケルン墓群の西南西約1kmに位置する緩丘陵上の小型ケルン墓群。2基のケルン墓と、これに伴う4基の小遺構から成る。第三次調査の前半に、ケルン墓2基と小遺構2基を半裁またはトレンチ発掘した。

丘陵先端部に位置する1号ケルン墓（RHD-3/BC-01）は、半地下式の矩形墓室を備え、その周囲に詰め石を伴っていた（図8）。この型式は、ヘダージェ編年の2期中頃（規模が小さいので、おそらくは8～6号ケルン墓の並行期）に位置づけられるであろう。2号ケルン墓（RHD-3/BC-02）もこれに類似するが、詰め石部分の幅が狭くなっているという点で、2期終盤（5号ケルン墓の並行期）に比定される。従って、本ケルン墓群は、ヘダージェ編年で言う2期の期間中に短期造営されたものと考えられる。（なお、2号ケルン墓の墓室最下層から、板状スクレイパーが1点出土した。同様の石器は、ヘダージェ1の10号ケルン墓でも出土している。従って、シリア北東部では板状スクレイパーが少なくとも中期青銅器時代の前半まで用いられていたと考えられる。）

一方、1号小遺構（RHD-3/F-01）は全長約9.5m × 幅約2～3mの地上式建造物で、舟形のプランを示す。大型の建材で周囲を縁取り、その内部に雑多な石および砂質土壌を詰め込んでいた。擬壁（ケルン墓付帯の独立壁）の一種と考えられる。2号小遺構（RHD-3/F-02）は、その小型版（全長約5m × 幅約1m）である。ケルン墓と擬壁の組み合わせは、ヘダージェ1=ケルン墓群でも複数確認されており、この地域のケルン墓群に共通の特徴と認められる。なお、3号小遺構（RHD-3/F-03）は直径約0.8mの小型集石遺構で、大型の石材で周囲を囲い、その内部に小石を詰めていた。これに対して4号小遺構（RHD-3/F-04）は、直径約1mの、明確な縁石を伴わないタイプの集石遺構であった。こうした集石遺構の類例も、ヘダージェ1=ケルン墓群で多数確認されている。

### 5. ヘダージェ4 = ケルン墓群

ヘダージェ1=ケルン墓群の北約1kmに位置する独立丘上の小型ケルン墓群。2基のケルン墓と、これに伴う5基の小遺構から成る。第三次調査の最終日に、2号ケルン墓と5号小遺構をトレンチ発掘した。

2号ケルン墓（RHD-4/BC-02）は、半地下式の楕円形墓室を持ち、これを周壁で囲っていた（図9）。この型式は、ヘダージェ編年の3期（特に3号ケルン墓の並行期）に位置づけられるであろう。地表面での観

察によれば、隣接する1号ケルン墓も同様の型式と予測される。だとすれば、本ケルン墓群は、ヘダージェ編年で言う3期の期間中に短期造営されたことになるであろう。一方の5号小遺構（RHD-4/F-05）は全長約24mの石壁で、丘陵の南縁に沿って構築されていた。両側・両端を大型立石で囲い、その内部に小石を詰め込んでいた（図10）。ケルン墓付帯の擬壁と考えられる。このほか、ヘダージェ3=ケルン墓群で述べたような小型集石遺構（RHD-3/F-01～04）も、数件確認された。

## 6. 考察

一連の調査によって、ヘダージェ=ケルン墓群が二つのグループに分類できることが分かった（図3）。一つは、ヘダージェ1南列（1～10号ケルン墓）やヘダージェ2のような、長期造営型の大規模ケルン墓群である。ヘダージェ1北列（11～14号ケルン墓）も、途中の中断を除けば、これに準ずるであろう。これらのケルン墓群間には大きな時期差は無く、ほぼ並行して造営されたと考えられる。もう一つのグループは、ヘダージェ3および4のような、短期造営型の小規模ケルン墓群である。形式的な比較によれば、その年代は大規模ケルン墓群の造営期間内に収まるものと思われる。

このように、大型ケルン墓群がほぼ並行して造営され、しかも小型ケルン墓群がその造営期間内に収まるとすれば、ヘダージェ地域のケルン墓群は、中期青銅器時代Ⅰ期を中心とする数百年間に集中して造営されたことになるであろう。地表面での観察による限り、周辺地域のケルン墓群の型式も大同小異であるから、やはり同じ時期に集中造営されたと推測される。中期青銅器時代北東シリアにおける遊牧民の一大勢力---ピシュリ山系北麓のケルン墓群が Martu/Amurru の墓



図10：ヘダージェ4=ケルン墓群：05号小遺構

域である可能性は、ますます高くなった。

では、これらのケルン墓群は、どのような集団を単位に造営されていたのであろうか。難しい問題ではあるが、ヒントはいくつかある。第一は、大規模ケルン墓群の間に大きな時期差が認められず、ほぼ並行して造営されたと考えられること、である。従って、その背後に相当数の同時代集団を見込まねばならない。ヘダージェ地域だけでも2～3の集団が想定されるので、ピシュリ山系北麓全体では数十、あるいはそれ以上になるであろう。第二のヒントは、一件の大規模ケルン墓群を構成するケルン墓の数である。ヘダージェ1南列では10基、ヘダージェ2の南列も約10基、その他、ルジウム・ハイユーズもほぼ同数であった（藤井・足立2007）。10基で最大200～300年をカバーしたとすれば、1基では最大20～30年。これは、一世代に一件というケルン墓の構築原理を示唆しているように思われる。

二つの観察から、次のような作業仮説が成り立つ。すなわち、部族・氏族よりもさらに下位の集団（例えば拡大家族など）が個々のケルン墓群の造営に当たり、家長の交代毎に順次ケルン墓を構築していった、という仮説である。この場合、そこに葬られるのは家長とその拡大家族構成員ということになるが、ヘダージェ1=ケルン墓群出土人骨の分析でも、性・年齢の多様性が指摘されている（Nakano 2008）。また、銅石器時代から青銅器時代にかけての被葬者層の下位シフト（すなわち、部族長墓・氏族長墓から家族墓へのシフト）は、ヨルダンの調査事例でも示唆されている（藤井2008b）。だとすれば、長期造営のケルン墓群は比較的安定したファミリーを、短期運営のケルン墓群は何らかの事情で分派・消滅したファミリーを、それぞれ表していることになるのかも知れない。この点、後者の事例がヘダージェ編年の後半に集中していることは示唆的であろう。

なお、ピシュリ山系北麓の大規模ケルン墓群が10基前後のケルン墓から成るという事実は、再度強調しておきたい。ヨルダンやイスラエル、あるいはアラビア半島各地のケルン墓群と比べて、格段に少ないからである。繰り返しになるが、その理由の一つは、全体の造営年数が短いことにあると思われる。

## 7. おわりに

ヘダージェ=ケルン墓群の編年に、ようやく目処がついてきた。アクセスの悪さにも、ピシュリの砂嵐にも、大分慣れてきた。最終年度の目標は、二つである。第一は、ワディ=ラフォーム周辺の未盗掘ケルン墓を調

査して、より確実な年代観を提示すること。第二は、ビシュリ山系北麓全域を再踏査して、ケルン墓群の分布と構成を包括的に理解すること、である。そのため、2009年の3月と6月に、第4次・第5次の調査を計画している。最終的には、これら一連の調査を通して、ビシュリ山系北麓ケルン墓群の考古学的意義（特にmar-tu/amurru問題との関わり）を明らかにしたい。

#### 参考文献

- 足立拓朗 2008 「ヘダージェ1=ケルン墓群出土の青銅製品」『Newsletter セム系部族社会の形成』11: 7-13.
- 藤井純夫 2005 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」『Newsletter セム系部族社会の形成』1: 6.
- 藤井純夫 2006 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」『Newsletter セム系部族社会の形成』2:5-7.
- 藤井純夫 2008a 計画研究班「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」大沼克彦編『セム系部族社会の形成 平成19年度研究成果報告』（印刷中）
- 藤井純夫 2008b 「遊牧部族の形成過程：カア・アブ・トレイ八西遺跡におけるケルン墓造営集団の分層化」大沼克彦編『セム系部族社会の形成 平成19年度研究成果報告』（印刷中）
- 藤井純夫・足立拓朗 2007 「2007年度ビシュリ山系北麓ケルン墓サーベイ」『Newsletter セム系部族社会の形成』7: 1-5.
- Fujii, S. (2004) Harra al-Burma Cairn Line, Wadi Burma Cist Enclosures, Wadi Burma Kite Site, and Harrat al-Sayyiyeh K-line: A Preliminary Report of the Second Operation of the al-Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2 (2003, Spring). *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 48: 285-304.
- Fujii, S. (2005) Wadi Burma North, Tal ' at Abyda, and Wadi Qsayir: A Preliminary Report of the Third Operation of the al-Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2 (2004, Summer). *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 49: 17-55.
- Fujii, S. (2008a) The General Survey of Pre-Islamic Burial Cairns in the Northern Flank of Jabal Bishri. In: al-Maqdissi, M. and K. Ohnuma (eds.) *Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological Joint Research in the Region of ar-Raqqa, Syria*, 2007. *Al-Rafidan* 29: 117-193.
- Fujii, S. (2008b) A Brief Sounding at Rujum Hedaja 1. In: Ohnuma, K. and Khabur, A. (eds.) *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Fifth Working Season* (Field Report submitted to the Department of Antiquities and Museums of Syria) .
- Fujii, S., T. Adachi, and K. Suzuki (2008a) The Second Field Season at Rujum Hedaja 1. In: Ohnuma, K. and al-Khabur, A. (eds.) *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Sixth Working Season* (Field Report submitted to the Department of Antiquities and Museums of Syria) .
- Fujii, S., T. Adachi, and K. Suzuki (2008b) The Soundings of the Hedaja Cairn Fields, the Northwestern Flank of Jabal Bishri. In: Ohnuma, K. and Sultan, A. (eds.) *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Seventh Working Season* (Field Report submitted to the Department of Antiquities and Museums of Syria) .
- Nakano, Y. (2008) A Morphological Study of the Human Bones from Rujum Hedaja. In: Ohnuma, K. and Sultan, A. (eds.) *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Seventh Working Season* (Field Report submitted to the Department of Antiquities and Museums of Syria) .

## テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査

久米正吾（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）

計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」研究協力者

沼本宏俊（国士舘大学体育学部）

計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」研究代表者

はじめに

本特定領域研究「セム系部族社会の形成」プロジェクトでは、シリア、ユーフラテス川流域の青銅器時代集団構造の動態的解明を目指している。過去の集団構造に考古学からアプローチするためには、いくつかの手法がある。集落内の家屋プランや遺物の出土状況を詳細に調べて、過去の人々の行動のまとまりを復元する世帯考古学的アプローチもそのひとつだろう。一方、もうひとつ代表的な研究戦略として、当時の墓や埋葬の習慣を調べることがある。

言うまでもなく、埋葬にかんする考古学的研究は、当時の社会組織を復元する上で最も重要な分野のひとつとされている。その理由は埋葬の考古学がもつ特性、つまり過去の個人のアイデンティティを復元する潜在性を有していることにある。副葬品や人骨を調べることによって、埋葬された人々の階層やジェンダー、出自が判明することは稀なことではない。また、社会的現象であるがゆえに通常考古学は不得手とされるエスニシティという問題も、埋葬の考古学が過去の個人に目を向け続ける限り、決して手の届かない空虚なものではないように思われる。

それでは、「セム系部族」を果たして考古学的に定義できるか否か？その疑問にまだ答えを出すことはできない。ただ、上記のような潜在性をもつ埋葬の考古学的証拠を丹念に調べることによって、少なくとも考古学的意味における「部族」集団にアプローチすることは可能かも知れない。そしてそれは本プロジェクトへの直接的貢献につながるはずである。

このような動機と背景のもと、すでに発掘調査が進められている前期青銅器時代、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡（Hasegawa 2008; Kiuchi 2008; Negishi 2008）直近に位置する墳墓群の調査を2008年より開始した。遺跡直近に前期青銅器時代と思われる墳墓群が存在していることは、2007年11月～12月（Tsuneki 2008）及び2007年3月（Numoto in press）に実施された事前調査においてまず確認された。これらの巡検で明らかとなったことは以下の3点である。

第一に、ガーネム・アル・アリ遺跡直近には墓域が二ヶ所存在していることである。加えて、いずれの墓域からも前期青銅器時代の土器片が採集されているため、遺跡とほぼ同時代の所産と考えることができる。

ひとつめの墓域は、ユーフラテス川によって削られてできた崖の上、ビシュリ台地の縁辺に広がるワディ・シャブブート（Wadi Shabbout）墓域である（図1）。ユーフラテスの豊富な水資源を利用した灌漑農業が営まれ緑豊かに見える氾濫原や低位段丘面とは対照的に、この台地上には荒涼とした乾燥地が広がっており、主に家畜の放牧に用いられている。ガーネム・アル・アリ遺跡から約1km程南に位置するこの墓域では、台地の突端部にテル・シャブブート（魚 鯉 の丘の意）と地元では呼ばれる墳丘墓が造営されているのをまず確認できる。この墳丘墓が立地する台地の高度は海拔278m程で、高度約230mのユーフラテス川段丘面に位置するガーネム・アル・アリを見下ろす絶

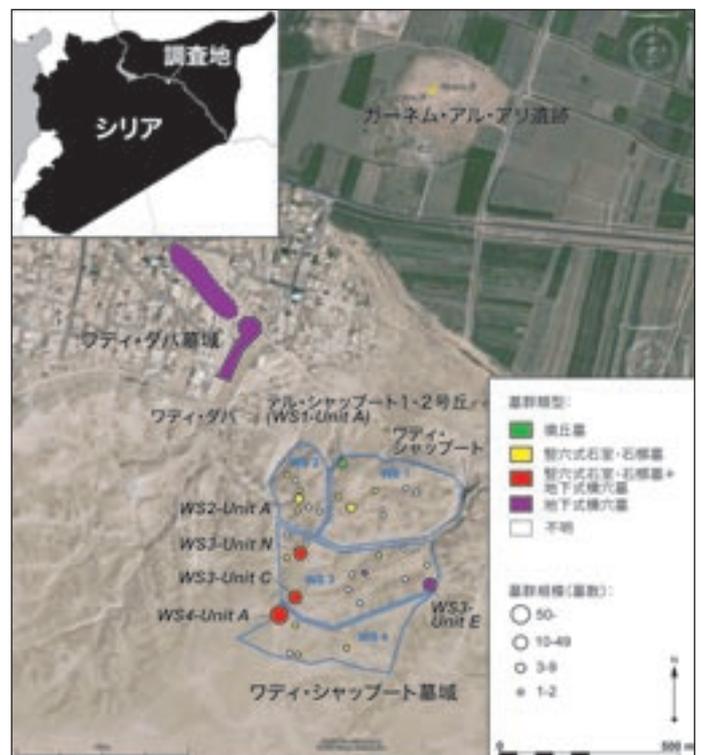


図1：ワディ・シャブブート墓域の位置と墓群の分布状況（衛星画像はGoogle Earthから引用）

好の位置である(図2)。さらに、その墳丘墓の上に登って、ビシュリ山の方を眺めてみると、そこには無数の墓が群集して広がっている(図3)。総計数千基で構成されるかとも思われる大規模な墓群である。

これら崖上の墓域とは別に、崖下の平地部分にもうひとつ墓域がある。遺跡から約800m程南東、現在ではガーネム・アル・アリ村の一部となっている場所に、ワディ・ダバ(Wadi Daba:ハイエナの谷の意)と呼ばれるワディの河口部がある。その斜面に計50基程の墓が造営されていた(図4)。この墓域はさらにユーフラテスの段丘斜面にまで広がっていたようだが、現在では宅地となって失われている(図1)。

第二に事前調査で明らかになったこととして、これらいずれの墓域も盗掘によりひどく破壊されている点があげられる。村人への聞き取り調査により、盗掘は、過去数十年間すなわち比較的最近になってからの所為との情報を得ている。また、盗掘だけではなく、先にふれた宅地造成やその他の人為的土地改変も墓の破壊に大きく影響している。事実、ワディ・シャップート墓域では、事前調査で確認されていたいくつかの墳墓群が、2008年春の段階ですでに失われてしまっていた(図5)。これは、トラクターを利用してビシュリ台地上に豊富な石膏石材を大がかりに採掘したことによる。

第三に、このふたつの墓域に存在する個々の墓室構

造の構成が両者で異なることである。ワディ・タバ墓域がほぼ地下式横穴墓のみで構成されている一方、ワディ・シャップート墓域は、墳丘墓、竪穴式石室墓などより多様な構造の墓を確認することができる。

このような事前調査での成果に基づき、2008年に始まった本調査では、大筋として以下3点の目的が設定された。

まず、それぞれの墓域に広がる個々の墓(群)の造営年代を決定するより確実な物的証拠を数多く揃えることである。事前調査でおよその年代は得られているものの、個々の墓(群)の細かな年代差を捉える情報を多く集められれば、今後研究を進めていく際、その分析をより詳細に行うことができる。また、集落遺跡であるガーネム・アル・アリに直近しているとはいえ、今回調査の対象とする墓が必ずしもガーネム・アル・アリの青銅器時代居住民によって営まれた墓域であるとは限らない。仮に同時代性が保証されたとしても、同居住民の墓であると完全に証明したことにはならないが、少なくとも、遺跡との関係を考察する上で墓の造営年代にかんする証拠をより多く準備しておく必要がある。

次に、調査を迅速に進めることである。これにはふたつの意味が含まれている。ひとつは、先に述べたように、土地改変による墓の破壊が現在なお進んでいる



図2:テル・シャップート墳丘墓群(WS1-Unit A)。2基の円墳で構成されている。写真右奥にユーフラテス川の氾濫原とテル・ガーネム・アル・アリ遺跡が見える。



図3:盗掘を受けた墓群(矢印)



図4:ワディ・ダバ墓域。地下式横穴墓が多数盗掘を受けている。



図5:トラクターにより破壊された痕跡(ワディ・シャップート墓域)。少なくとも数基の墓が2008年春に失われた。

ことである。そのため、早期に調査を実施しなければ墓から得られる情報が失われてしまう可能性がある。もうひとつは墓域の規模である。特に数千基とも予想されるワディ・シャップート墓域の場合、その全てを詳細に調べることは現実的ではない。したがって、短期間で可能な限りの情報を得る手法を選択する必要がある。

最後に、墓域に広がる個々の墓（群）の多様性を記録することである。事前調査では少なくともふたつの墓域間で墓室構造の構成が異なることが指摘された。同様に墓域内においても構成の異なる墓群が存在している可能性がある。仮にその多様性を抽出し、さらに解釈することができれば、青銅器時代における集団構造の解明へ向けて大きく寄与すると期待できる。

この3点の目的を達成するために、2008年の第1次、第2次調査では、発掘やクリーニングによる調査は最小限にとどめ、調査地を踏査することによって、主に墓室構造を記録し、そこから墓群の特徴を把握する調査手法を採用した。この手法を採った理由としては、墓の現状も大きく影響していた。残念ながら、いずれの墓も盗掘・破壊の被害が著しい。そのため、墓の考古学的調査を実施する際、通常であれば主要な分析対象となるはずの副葬品や埋葬個体の情報が極めて乏しいことが予想された。その反面、盗掘時の掘削のため墓室がむき出しになっている墓が多く、その墓室構造を比較的容易に観察できる事例が多数認められる。このような調査目的と遺跡現況との微妙なバランスの中で、調査の第1ステージが開始された。

#### 第1次調査（2008年4月～5月）

2008年春に実施された第1次調査では、ワディ・シャップート墓域の盗掘墓のクリーニングと踏査を実施した。ワディ・シャップートを優先した理由は、その規模が大きいため多くの時間を割く必要があることと、より墓室構造の多様性が把握できる可能性が高かったためである。同時に、ワディ・ダバ墓域を避けた理由としては、現在の村の中に位置しているため、調査を進める上で若干の困難を伴うことが予想されたこともある。したがって、ワディ・シャップートの調査がある程度進んだ段階で、ワディ・ダバの調査に移行するという運営方針が図られた。

調査を開始するにあたり、台地上を網の目のように流れるワディの流路に沿って墓域を便宜的に分割した。なお、各調査地区については、WS (Wadi Shabbout) という墓域名の略記と数字で示すことにした（例：WS1）。また、墓（群）については、単基で存在するも

のと群を構成するものがあるため、それぞれ「ユニット」として取り扱い、発見順にそのユニットにアルファベットを付した（図1）。したがって、個々の墓（群）は調査地区名とユニット名の組み合わせで表記されている（例：WS1-Unit AあるいはWS3-Unit A）。

調査はまずWS2-Unit Aのクリーニングから開始された。クリーニングを先に実施した背景には、調査地の墓の特徴を詳細に把握する必要に迫られたことがある。今後実施される踏査に向けて、いわば「目をならして」おきたかったわけである。また、WS2-Unit Aはその規模が筆者らの短期の調査期間と見合っており、加えて複数の墓室型式の墓が混在していたため、最初に着手する調査対象として最適であった。

WS2-Unit Aは、ビシュリ台地縁辺部を急峻に切れ込む2つの名称のないワディの間に位置している（図1）。その位置は台地突端からやや内陸に入り込むものの、崖を大きく切り込んだ東側のワディのため、ガーネム・アル・アリ遺跡とそのワディの対岸にあるシャップート墳丘墓群をよく望むことができる。高度は海拔276m程である。

WS2-Unit Aでは長軸（南北）30m、短軸（東西）16m、高さ75cm程の自然丘が発達しており、その丘に7つの盗掘坑が存在していた（図6, 7）。クリーニン



図6：クリーニング、試掘を実施したWS2-Unit A。微高地の上に6基の墓が造営されていた。

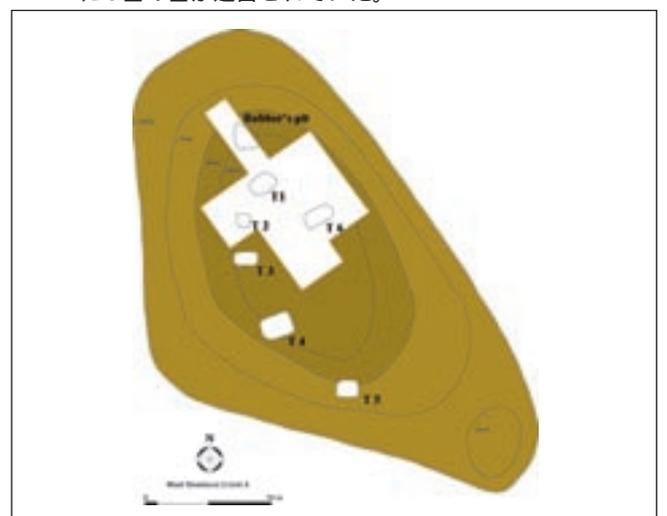


図7：WS2-Unit A平面図

グの結果、埋葬行為の痕跡が認められなかった北端の1つを除く計6基の墓で構成される墓群であることがわかった。墓の軸方向はいずれも概ね東西方向を示しているが、これはユーフラテス川流域の前期青銅器時代において一般的傾向である。

確認された墓の構造は竪穴式石室墓および竪穴式石郭墓のみで、石造墓室を有する墓だけで構成されていた。石材は台地上でたやすく手に入る石膏の平石を用いている。いずれも盗掘によりひどく損傷を受けており、墓室内に堆積土はほとんどなかった。3号墓（石槨墓：図8）や4号墓（石室墓と石郭墓の折衷：図9）5号墓（石室墓：図10）の事例では、石室の石材がほとんど失われている状態であった。やや異色な墓は2

号墓（石槨墓：図11）である。その他の墓がいずれも2×1m程のサイズであったのに対し、この墓は1×1m程の方形を呈する。幼児の墓だったのか、それとも再葬墓であったのか、今後類例の検討を待ちたい。1号墓と6号墓（いずれも石室墓：図12, 13）は、比較的残存状況が良好であった。中でも6号墓は墓室内に堆積土が残存しており、ほぼ完形の土器が原位置で2点出土している（図14, 15）。ただし、この堆積土が墓を構築した当時のものであるかどうかは疑わしい。クリーニング作業の際、墓からの排土は全て2×2mmのふるいにかけて、骨片や歯の標本、あるいは小型のビーズなどの微細な遺物の回収に努めたが、この6号墓からは考古資料を全く回収することができなかつ



図8：WS2-Unit A、3号墓



図11：WS2-Unit A：2号墓



図9：WS2-Unit A：4号墓



図12：WS2-Unit A：1号墓



図10：WS2-Unit A：5号墓



図13：WS2-Unit A：6号墓

た。加えて、通常の堆積土がやや褐色味を帯びているのに対し、この墓の白色の石膏質土壌であり、風成による自然堆積の結果のように見えた。これらのことから、盗掘は古代と現代の2回にわたって行われていた可能性がある。

回収された遺物は必ずしも多くはなかったものの、年代を特定できる資料がいくつか含まれており、この墓群が造営された年代が紀元前3千年紀後半であることを示唆する。例えば、6号墓から原位置で出土した内傾する器壁をもつ半球鉢は、前3千年紀後半のユーフラテス川流域土器アセンブリッジに特徴的な器形である（図15右。Cooper 2006参照）。その他、貝製の環状製品（図16）や渦巻き様の溝を持つ穿孔製品（図17）も、同じく前3千年紀後半のユーフラテス流域類例がある。特に、貝製の環状製品は、ピシュリ台地の縁辺部から1.5km程南、ワディ・シャップート墓域の南端部に位置すると思われるアブ・ハマド（Abu Hamed）墓地遺跡からの出土例がある（Falb et al. 2005）。アブ・ハマドは、前期青銅器時代III期からIVA期（前2600年～前2300年頃）にかけて営まれた墓であることから、約1.5km四方ほどに広がるワディ・シャップート墓域の数千基の墓は、約300年の間に造営された可能性が暗示される。

他方、人骨資料は排土のふるいかけをしたにもかか



図14：完形土器の原位置出土状況（6号墓）



図15：6号墓から原位置で出土した完形土器

わらず、骨片や歯の標本を除いてほとんど回収されなかった。これは、盗掘による破壊が甚大だったこともひとつ理由として考えられるが、もうひとつ、周囲の石膏質の土壌が影響したのかも知れない。

これらのクリーニング作業に加えて、未盗掘墓の存否を探るための試掘調査もWS2-Unit Aで実施した。2×16m（南北）と2×10m（東西）2本のトレンチを丘頂で交差させて設置した。石列など特徴的な遺構が確認された際にトレンチを拡張したため、結果として計92㎡の範囲を調べた（図7）。しかし、すでに盗掘されていた6基以外の埋葬施設の痕跡をこの墓群から認めることはできなかった。

WS2-Unit Aのクリーニング終了後、ワディ・シャップート墓域の墓群分布調査に移行した。第1次調査では、WS1とWS2の2地区を踏査した。GPS受信機の使用が認められていない中で調査するにあたって、広大な範囲に広がる多数の墓群の分布を効率よく記録するために、高解像度の衛星画像を用いて位置を落とした。これは、本墓群調査に先立って実施されたガーンム・アル・アリ遺跡周辺での先史遺跡踏査での経験が役に立った（門脇ほか2008）。分布調査は全て徒歩により、調査区内の全域を網羅的に踏査した。したがって、盗掘が実施されておらず、それゆえに視認できない墓を除くほぼ全ての墓を記録したことになる。また、個々の墓の位置、墓室構造、群集状況、サイズ、墓室の軸方向などを細かく記録した。同時に年代の決め手となる土器片の採集も行った。



図16：貝製の環状装飾品（右：1号墓出土；左：試掘地点出土）



図17：4号墓から出土した渦巻き様の溝を持つ貝製の装飾品

踏査の結果、WS1とWS2の2地区では、すでにクリーニングを実施したWS2-Unit A（6基）を含め、計14ユニット、総数27基の墓が確認された。第1次の踏査成果としてまず挙げられる点は、調査地区の墓群が2種に分類されたことである。

第1の類型は、先述のテル・シャップートで構成される台地突端に位置する墳丘墓群である（WS1-Unit A; 図1, 2）。この墓群は主として2基の墳丘墓で構成されており、1号墓は、17m（南北）×15m（東西）、高さ2.5 m程の円墳である。2号墓も同様に円墳であり、10m（南北）×10m（東西）、高さ1m程を計る。いずれも墳頂に盗掘坑が確認されており（1号墓は5ヶ所、2号墓は2ヶ所）、内部構造や副葬品、埋葬個体はかなり攪乱されているものと思われる。この地点では2基の墳丘墓のほか、竪穴式の石造墓室を有する墓が1基確認されている。残念ながら、今回の調査では時代を特徴づける土器標本は採集されなかった。しかし、2009年春に発掘調査を予定しており、この墓群に关するより詳細な情報が得られるものと期待している。

次に第2の類型として、クリーニングを実施したWS2-Unit Aのように石造墓室を有する墓のみで構成される墓群が定義された。今回調査したWS1区とWS2区では、このパターンの構成をもつユニットが主体的であり、計7ユニット確認されている（図1）。これらの石造墓はおよそ長軸2m×短軸1m程のものが一般的であり、そのサイズから考えて単葬墓である



図18：WS4-Unit A。約100m×80mの範囲に計61基の墓の痕跡が認められた。

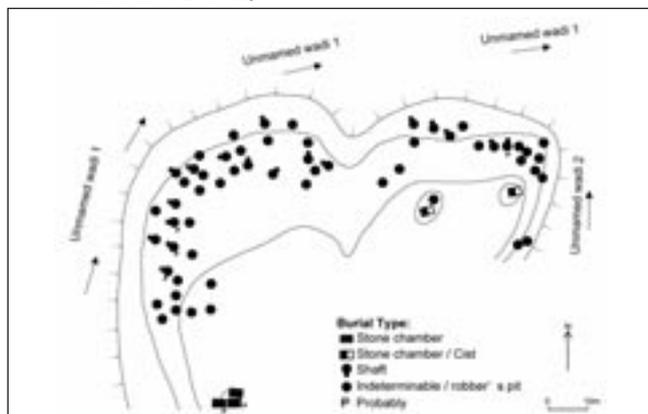


図19：WS4-Unit Aのスケッチによる平面図。ワディの段丘面に石造墓が、斜面に地下式横穴墓が掘り込まれていた。

と推測される。なお、WS2-Unit Aを除いた第2類型の6ユニットでは、年代決定の証拠となる特徴的な標本を採集することはできなかった。

以上のように、WS1区とWS2区の墓群の特徴は、墳丘墓ないし竪穴式の石造墓の2種の構造を有する墓でそれぞれ排他的に構成されている点である。一方、ワディ・ダバ墓域で確認された地下式横穴墓は、今回の調査地区では全く確認されなかった。このような結果に基づき、今回定義された2種の墓群構成パターンがワディ・シャップート墓域の未踏査地区にさらに拡がるのか、それとも全く別の墓群構成が存在するのか、という課題が次回の調査目的として新たに設定された。

#### 第2次調査（2008年10月～11月）

2008年秋に行われた第2次調査は、1週間程の短期間の予定で実施されたため、踏査のみに限定することにした。前回の調査地区の南側に、新たにWS3とWS4の2地区を設定し、第1次調査と同様の方法で踏査した。今回の調査では、計19の墓群、総数124基の墓を記録し（図1）、新たに第3、第4の墓群類型が定義された。

今回定義された第3の類型は、地下式横穴墓と石造墓室を有する墓で構成される墓群である。これは、WS3-Unit CとUnit N、あるいはWS4-Unit Aで確認されている（図1）。この墓群の特徴は、台地上を流れるワディや自然丘の斜面部に地下式横穴墓を掘り込み、やや高まった丘頂や段丘面に少数の竪穴式石室墓ないし竪穴式石郭墓が確認されるパターンである。最大規模のWS4-Unit Aの場合、約100m×80mの範囲に5基の石造墓室を有する墓と56基の地下式横穴墓ないし盗掘坑が確認された（図18, 19）。これらの3墓群から採集された土器標本には、いわゆる「ユーフラテス精製土器」（'Euphrates Banded Ware'）が少なからず含まれており（図20）、これらの墓群は前期青



図20：ユーフラテス彩文土器（上右：WS3-Unit C採集、下右：WS3-Unit N採集、上下左：WS4-Unit A採集）

銅器時代 期から A 期（約前 2600 - 前 2300 年頃）の所産であると考えられる。

第 4 の類型は、地下式横穴墓のみで構成される墓群である。ワディ・シャップート本流とその支流の合流点に位置する WS3-Unit E で確認された。この地点では、比較的急峻な支流の左岸斜面、約 36m の範囲にわたって 10 基の地下式横穴墓が掘り込まれていた（図 21, 22）。採集された土器はわずか 3 点と少なく、資料の状態も良好ではなかった。しかし、ユーフラテス精製土器と思われる土器片が 1 点確認されており、やはり前期青銅器時代 期から A 期に営まれた墓群であることが推測できる。事前調査のみで詳細な確認は今後の作業となるが、先にふれたワディ・ダバ墓域もやはり地下式横穴墓のみで構成されており、この第 4 類型に含まれるものと思われる。

これらの墓群のほかに、17 のユニットが今回記録されている。しかし、いずれも 1 基あるいは 2 基の墓で構成される小規模なものである。むろん、これらのユニットの周囲に未盗掘の墓が存在して群を構成している可能性は否定できないが、調査手法上、墓群として類型化するには至らなかった。

第 2 次調査は短期間であったものの、新たに 2 種の墓群構成パターンが定義された。また、採集された土



図 21 : WS3-Unit E の地下式横穴墓群。ワディに削られた急峻な斜面に計 10 基の盗掘坑が認められた。

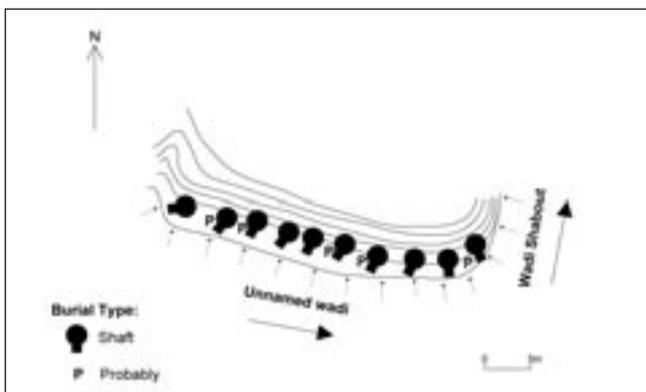


図 22 : WS4-Unit E のスケッチによる平面図。掘削の便宜が優先され、墓の軸方向は、斜面の向きに規定される。

器片にはより年代を特定しやすいユーフラテス精製土器が含まれており、今回踏査した墓群が、第 1 次調査で確認された墓群及びガーネム・アル・アリ遺跡と同時代の前期青銅器時代 期から A 期にかけて営まれたものであることが確認された。

おわりに

2008 年に実施した第 1 次、第 2 次調査では、WS1 から WS4 の 4 地区（計 34.7ha 程）において、計 33 の墓群、総数 151 基の墓を記録した（図 1）。今回の 2 次にわたる調査でガーネム・アル・アリ遺跡直近の墓域の性格がわずかではあるが明らかとなってきた。

まず、今回調査したワディ・シャップート墓域に広がる墓が、前期青銅器時代 期から A 期、すなわち前 2600 年から前 2300 年頃に営まれた墓であることがほぼ確実になったことである。これにより、直近の集落遺跡であるガーネム・アル・アリとワディ・シャップート墓域の関係について、同時代性を担保しつつ確実な議論を行う素地が作られた。さらに先にふれたように、ワディ・シャップート墓域の南端に位置すると思われるアブ・ハマド墓地遺跡もほぼ同じ年代であることから、約 1.5 km 四方に広がると推測される同墓域全域が、ガーネム・アル・アリ前期青銅器居住民によって造営された可能性も否定できない。事実、本プロジェクトの先史遺跡踏査班による調査成果により、ガーネム・アル・アリ近隣に位置する前期青銅器時代のハマディーン（Hammadin）遺跡直近の台地上にも、同様に大規模な墓域の広がりが確認されている（門脇ほか 2008）。この墓域の年代同定作業は進行中であり、証拠として適用するにあたってははまだ慎重にしなければならないものの、ガーネム・アル・アリ遺跡と共通の墓域分布のあり方は示唆に富む。

次に明らかになったこととして、ワディ・シャップート墓域には 4 種類の墓群が存在していることが示されたことがある。この 4 種類について現時点で重要と思われることは、これらの墓群類型がそれぞれ周囲の景観と密接な関係を持っているらしい点である。例えば、墳丘墓群（第 1 類型）と石造墓室墓群（第 2 類型）は、ピシュリ台地の突端の崖上、ガーネム・アリを見下ろす位置を占める。一方、石造墓室 + 地下式横穴墓群（第 3 類型）や地下式横穴墓群（第 4 類型）は台地の内陸部や台地下の低位段丘面などに立地している。ガーネム・アル・アリを見下ろす位置に造営され、構築に労力を要すると思われる墳丘墓群や石造墓室墓群は、例えば当時の人々の特別な埋葬行為を示しているのだろうか。それとも、前 2600 年から前 2300 年の約

300年間に異なる立地と異なる墓室構造の墓が選択されて通時的に変遷した結果なのだろうか。

残念ながら、このような疑問に答える証拠は今のところ手元にない。しかし、2009年の調査では、このような問題を少しでも解決し、前期青銅器時代の集団構造をより詳しく理解するための材料を得ることを目指している。現在、以下3点の課題が想定されている。

まず、踏査地域の拡大や発掘調査によって新たな情報を得ることである。例えば、今回の第1次、第2次調査では、1.5km四方に広がると予想されるワディ・シャップート墓域の約15%の範囲を踏査したに過ぎない。また、テル・シャップート1・2号丘やワディ・ダバ墓域は現時点では未着手である。これらの調査を継続することによって、より多様な証拠を収集することを目指す。

次に、未盗掘や未破壊墓を確認・調査することである。今回実施した盗掘墓を中心とした調査は、短期間で広範囲の様相を把握できる利点はあったものの、得られる情報が墓室構造と立地、あるいは散発的な年代決定用の標本（土器等）に限定される。本プロジェクトが目指す当時の集団構造を復元する考古学的証拠としては、これらのデータはその質的側面において若干の問題がある。そのため、試掘調査等によって未盗掘や未破壊墓を探索し、良質なデータが得られるよう努める。むろん、そのような偶発的な機会が必ずしも訪れるとは限らないため、すでに報告がなされている他の同時代墓地遺跡の文献を丹念に精査し、比較材料を揃える作業も併行して行われる必要がある。

最後に、もうひとつ重要と思われることは、同じく「セム系部族社会」プロジェクトの一部として調査が実施されている他の研究班による埋葬の証拠と今回筆者らが調査した墓域の成果とを突き合わせて考えることである。例えば、ガーネム・アル・アリ遺跡の表面採集遺物には埋葬コンテクスト特有の土製模型が含まれており、埋葬施設が存在していた可能性が高い（大沼 私信2008）。したがって、この集落内に造営された墓から得られる証拠とワディ・シャップートやワディ・ダバ墓域のような集落外墓地の証拠とを比較することによって、新たな展開を期待することができる。さらに、ビシュリ山系北麓では青銅器時代ケルン墓群の調査が進められている。現在ケルン墓群の一部は、前2千年紀初頭に年代づけられており（藤井・足立2008；足立2008）、ワディ・シャップート墓群よりやや遅れて造営されたものと想定されている。しかし、この両者の関係と年代差の意義を明らかにすることによって、ビシュリ山地域及びユーフラテス中流域にお

ける青銅器時代集団構造の解明に大きな前進が認められるものと思われる。

#### 謝辞

調査を実施するにあたり、赤司千恵氏（早稲田大学大学院博士課程）には現地調査の一部にご協力頂いた。また、本報告には筆者の1人（久米）が「セム系部族社会」プロジェクト計画研究班による先史遺跡踏査（代表：西秋良宏・東京大学総合研究博物館教授。協力者：門脇誠二・日本学術振興会特別研究員）及びガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査（代表：大沼克彦・国士舘大学イラク古代文化研究所教授。協力者：長谷川敦章・筑波大学大学院博士課程）に参加した際の成果も一部含まれている。これらの方々にも末筆ながら感謝申し上げたい。

#### 引用文献

- Cooper, L. (2006) *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. Routledge, New York and London.
- Falb, C., K. Krasnik, J.-W. Meyer and E. Vila (2005) *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal. 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarbrücker Druckerei & Verlag, Saarbrücken.
- Ohnuma, K and A. al-Khabour eds. (2008) Archaeological research in the Bishri region: report of the fourth working season. *Al-Rafidan* 29: 170-193.
- Hasegawa, A. (2008) Trench excavation in Square 1 of Tell Ghanem al-Ali. In K. Ohnuma and A. al-Khabour (eds.) *Archaeological research in the Bishri region: report of the fourth working season. Al-Rafidan* 29: 176-178.
- Kiuchi, T. (2008) Trench excavation in Square 2 of Tell Ghanem al-Ali. In K. Ohnuma and A. al-Khabour (eds.) *Archaeological research in the Bishri region: report of the fourth working season. Al-Rafidan* 29: 178-181.
- Negishi, Y. (2008) Trench excavation in Squares 3-5 of Tell Ghanem al-Ali. In K. Ohnuma and A. al-Khabour (eds.) *Archaeological research in the Bishri region: report of the fourth working season. Al-Rafidan* 29: 181-183.
- Numoto, H. (in press) A brief survey of the Early Bronze Age tombs in the Wadi Shabbout and the Wadi Daba areas. In K. Ohnuma and A. Al-Khabour (eds.) *Archaeological research in the Bishri region: report of the fifth working season. Al-Rafidan* 30.
- Tsuneki, A. (2008) A short history of Ganam al-Ali village. In K. Ohnuma and A. al-Khabour (eds.) *Archaeological research in the Bishri region: report of the fourth working*

season. *Al-Rafidan* 29: 184-190.

足立拓朗 (2008) 「ヘダージュ 1 = ケルン墓群出土の青銅製品」『セム系部族社会の形成 Newsletter』11: 7-13.

門脇誠二・久米正吾・西秋良宏 (2008) 「ガーナム・アル・アリ遺跡周辺における先史時代遺跡の踏査 - 第

5次ビシュリ現地調査より - 」『セム系部族社会の形成 Newsletter』11: 3-6.

藤井純夫・足立拓朗 (2008) 「ビシュリ山系北麓ケルン墓群の年代と考古学的意義」『日本西アジア考古学会第13回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会、pp. 53-58.

### 事務局だより

本領域の研究の最終年度となる平成21年度は、4月の第8次現地調査、5～6月の第9次現地調査（総括的調査）、8～9月の第10次現地調査（補足的調査）、11月の国際シンポジウム、22年初頭の第6回公開シンポジウムと外部評価、そして、最終報告書の出版など、重要な研究活動が詰まっています。

平成19年の2月15日に現地調査の許可を取得して以来、この2年間で7度というきわめて高い頻度で実施した現地調査、また、本年1月31日と2月1日に開催した第5回公開シンポジウムでの学際的な討論を通して、最終年度を間近にしてようやく、本領域の全体課題の解明に向けた手応えを感じとれるようになりました。

総括班は、本研究領域の主眼「複数研究分野の連携を通じた総合的研究」の初志を貫徹し、個別研究成果の単なる総和でない融合的な研究を統括的に促進し、ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の「部族社会の形成」の内実の解明をめざします。

（大沼克彦）

---

Newsletter 「セム系部族社会の形成」 No.14 2009年2月20日発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」  
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」  
代表 大沼克彦

編集：総括班（大沼克彦・藤井純夫・西秋良宏・常木 晃・宮下佐江子・佐藤宏之）  
事務局：〒195-8550 東京都町田市広袴1-1-1 国土館大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室  
Tel：042-736-5489 Fax：042-736-5482 E-mail：kaonuma@kokushikan.ac.jp  
ホームページ：http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html

